

序文

宮原勇先生のご退職記念号として編まれた今回の『名古屋大学哲学論集』は、部局再編で新しく創設された人文学研究科・哲学研究室の所属となった私にとって、期せずして『論集』に寄せる最初の文章となった。否、なってしまった。本来であれば、学生、教員の別なく、哲学研究室の構成員がそれぞれの哲学的関心事を互いに披露しあうこの特権的な媒体を最大限に活用しつつ、知的遊戯——至高の愉楽である哲学遊戯——に興じるべきであったのだろうが、多忙にかまけて機会を逸し続けてきた挙句、得難い先達との協働がもはや叶わぬものとなることへの長嘆息を書き綴ることになってしまいそうである。これは疑いなく私自身の怠惰が招いたことである。しかし、ここはひとまず気を取り直して、なによりも宮原先生のご業績を振り返っておかねばならないだろう。

先生は、昭和30年7月17日、長野県にてご生誕され、昭和54年3月京都大学文学部哲学科哲学専攻をご卒業、同57年3月京都大学大学院文学研究科哲学科哲学専攻修士課程を修了されたのち、同57年4月に京都大学大学院文学研究科哲学科哲学専攻博士後期課程へと進学された。同60年3月、京都大学大学院文学研究科博士後期課程を研究指導認定退学、同年4月から6月まで京都大学文学部研修員となられたが、同年7月に拠点を東に移され、愛知県立大学文学部(一般教育学科)講師に就任された。昭和63年10月、先生は同大学にて文学部(一般教育学科)助教授に、元号を跨いで平成7年10月、同大学文学部(一般教育学科)教授、三年後の平成10年4月、同大学外国語学部(ドイツ学科)教授に昇進された。先生が名古屋大学文学部教授に着任されたのは、それから十年を経た平成20年4月であった。以来、一三年間、本学哲学研究室にて研究・教育にご尽力された先生は、令和3年3月、本学を定年退職されるにいたる。

こうして眺めてみると、博士後期課程を含めれば、先生の哲学者としてのご経歴は四〇年を超えている。かくも長きにわたり学究の軌跡を描くことが制度的に保証されてきたのは、むしろ私やただ一人の同僚となられる鈴木先生をも含め、いまとなっては相当に幸運なことであり、そしておそらく今後はますます例外的に幸運なこととなるだろう。「社会貢献」のための実用価値が喧しく謳われる昨今、「実」とは何か、「社会」とは、そして「貢献」を含めた他者との関係性とは何かを内省的に問う姿勢

は、短期的且つ直截な成果を求めて“競争”を急き立てる中央行政府、地方自治体、企業、あるいは成金の小金持ちたちにとって、投資に値しない私事、もしくは気まぐれな夢想の如きものと見なされる傾向にあるのは言を俟たない。それゆえ哲学研究室もまた、総合大学の体面上、しばらくはやむなく設置しておく控えめな遺物の扱いを受けてゆくであろうことを予想するのはあまりに容易い。遺物へのさらなる装飾は不要であり、したがって退職教員の補充人事はなされない、というわけだ。

こうした風潮は、しかし、当然ながらいまに始まったことではない。宮原先生にゆかりの深い近代ドイツの大学事情をほんの少し思い返してみれば十分だろう。神学に対して従属的な地位に甘んじていた中世が過ぎ去ったあとも、哲学は自身の庶流にすぎなかった(現代でいうところの)自然諸科学の圧倒的な可視性、明証性をまえに徐々に周縁化され、とりわけ法学や医学のような行政府お抱えの実学によって、学知・教説の重要性にかかわる優先順位を下方へと押し下げられていた。一八世紀が終わろうとする頃、カントが『諸学部争い(*Der Streit der Fakultäten*)』を執筆したのも、古典古代では一般人向け自由七科を鳥瞰する位置にあったはずの哲学が、かつての自らの諸分派(法学、医学、統計学等々)によって「下級学部(*untere Fakultät*)」——カント自身の言葉だ——の演題となりつつある事態を受けてのことであった。ハプスブルク帝国、ロシア、フランスなどとの戦争に明け暮れていたプロイセンにあって、哲学が“不要不急”の扱いとなるのを避けることには、カントですら難儀していたのである。より現代的な別の例を挙げれば、哲学教育が盛んなことで有名なフランスの戦後においてさえ、68年の「革命」後には、社会的混乱を招き産業を麻痺、停滞させる(とされる)哲学教育への風当たりは相当に厳しかったが、それからさらに半世紀以上を経た現在とはといえば、“実務家”肌の大統領率いる現政権下で進められてきたバカロレア改革が今年(2021年)から実施の運びとなることで、試験の可否にかかわる哲学の比重が事実上低下するとの懸念が生じている。あのフランスでさえ、というべきだろう。私たちは激動の東プロイセンに生きているわけでも、同じく「ヨーロッパ諸学の危機」に直面していたフッサールと同じ強度の切迫感を抱いているわけでもないにせよ、誰もが地球大の経済的、政治的メガ・コンペティションにさらされ、否応なくそこに巻き込まれてゆく現下の情勢は、哲学の“不要不急”が普遍化されようとしている現実を私たちに突き付けるとともに、哲学を選んだ者たちになにがしかの応答を迫っているには相違ない。

しかし、見方を変えれば、外部状況の如何にかかわらず、哲学はもともと周縁化されがちなものであった、あるいはむしろ、そのようなものでしかありえなかったともいえる。ありとあらゆる「自然的態度」の如きを相対化しつつ問いの俎上にのせることをやめない哲学は、その本性上、大方の者たちには“実社会”なるものを麻痺させる毒(φάρμακον/ファルマコン)とさえ映るが、同時にそれは、因習、臆見、“ハビトゥス”等々によってがんじがらめになり疲弊している者たちのための薬(φάρμακον/ファルマコン)でもありえる、という両義性を持っていた。哲学の宿痾ともいえるこうした両義性が、当の哲学自体を人間の共同体の周縁、否、境界に据え続けてきたのである。してみれば、哲学の不遇は、ソクラテス以来、別段、変わるところがないのかもしれない。実際、「迫害は哲学者にとって幸いである」ことを自明視していたレオ・シュトラウスにせよ、「良識(le bon sens)は哲学の敵」と言い放ったドゥルーズにせよ、現代の尖鋭的な哲学者たちもまた、そうした古典的両義性を留保なく引き受け、自らの生き方として反復してきたのではなかったか。

宮原先生も同様に、ご自身^{dissertation}なりのやり方で、「ファルマコン」を市井の人々に送り届け——デリダ風にいえば——“散種”するすべを絶えず意識し模索してこられたように思われる。

なるほど、無責任な第三者が経歴だけを書面上で眺めれば、まさに古き良き“昭和の学者の王道”を泰然と歩んでこられたかに見え、たしかにそれは事実でもあるのだろう。平成5年から平成6年にかけてフンボルト財団の奨学研究者として渡独、現象学会会長クラウス・ヘルト氏のもとで研究を進められた先生は、県立大から本学に移られたあとも、認知言語学と現象学的言語論とを結びつける先端的な試みに取り組まれていた。近年は科学研究費補助金を得てフライブルクのフッサール文庫をたずね、フッサールの時間意識分析にかかわる草稿を文献学的に調査されつつ、従来の定説を覆す主張を展開してこられた。くわえて実務面でも、日本現象学会、日本哲学界、中部哲学界、名古屋哲学会の委員・委員長を歴任、学内にあっては個別的な役職をひとつひとつ挙げるのが面倒になるほど(エコトピア科学研究所運営協議会委員、情報連携統括本部会議委員、学生相談総合センター運営委員等々)、様々な業務をこなされもしてきた。「職業としての大学人」を完璧に演じられたとあってよい。しかしその一方で、先生は“非哲学者”との接触をけっしてなおざりにはされなかった。上述のようなご多忙のなか、ほぼ三〇年にもわたって先生は朝日カルチャーセンターの講

義を担当され—文字どおりの奉仕である—、講義後も丑三つ時まで「社会人」たち(巨大企業のお歴々を含む)との対話に時間を惜しまれることがなかった。長年の酒の席が祟ったのであろう、先生はいつときご体調を崩されることにもなったが、講義自体はその後も続けてこられた。

個別的な研究面でも宮原先生は“王道”からあえて逸れる試みを重ねられた。フッサール、ハイデガーはむろん、カントからデイルタイ、ガダマーにいたるまでの正統派的な近現代ドイツ哲学研究を粘り強く続けられる傍ら、先生は現代の分析哲学における心身問題や「強いAI」に関する基本的文献(John R. Searle, *The Rediscovery of Mind*)の翻訳(単独)ならびに啓蒙書の刊行を精力的におこなわれるなど、哲学的思弁とその最果てに一瞬見え隠れする「境界」と思しきもの—身体とテクノロジー、あるいはむしろ、テクノロジーによって媒介された身体—に向けて、拔かりなくアンテナを張られていた。ただしそれは、素朴な外在性/内在性の対、あまりに「自然的」な外部/内部の実在性を「還元」すべく、自らの内省それ自体にさえ自己言及的に知的暴力をふるい続ける現象学の徒のみが張ることを許されたアンテナであるだろう。このあたりは、別様の意図、別様の論調、別様のかたちではあろうが、50年代ハイデガーの技術論への接近をそこはかとなく予感させるかもしれない。かくして宮原先生が辿ってこられたのは、“昭和の学者の王道”などというよりは、単純に哲学の正統であったという思いを私は強くする。

紙面があまり残されていないようだ。思い返せば、私が哲学研究室にやってきて早くも二年後に田村均先生が定年退職された。新設されたばかりの人文学研究科教授会で暴言毒言を垂れ流し続ける私に、田村先生は「布施先生は圧倒的に正しい」と力を込めていってくださったのを私はよく覚えている。昨年度に退職された金山弥平先生については、むろん多言を要するものではないだろう。金山先生は哲学研究室にとって—性別は異なるが—アテナイの守護神のような方であったとだけいっておけば事足りる。そして今年はずいぶん“最後の砦”である宮原先生が同僚ではなくなる。哲学者間の、哲学者らしい節度と思慮に裏打ちされた緩やかな連帯が霧消してしまい、もはや虚ろで嫌な薄ら笑いしかでてこない状況というべきか—。とはいえ、捨てる神あれば拾う神あり。研究者としての力量はいうに及ばず、お人柄も庶務の処理能力も、万事にいたって文句のつけどころのない鈴木真先生が同僚となってくださったのは、私にとって分不相応な幸運というほかない。

それにしても、なんとも摩訶不思議なことだ。「所詮人間など何匹群れようとただのゴミ」とでもいわんばかりの尊大な幻想のカーテンをやんわりと引き開け、心地よい日の光を当ててくれる思慮深い恩師、友人、研究仲間、そして同僚たちに、どうしたわけか、私はつねに恵まれ、助けられてきたのだから。

布施 哲